

---

# 悲しみの色

冴河冴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悲しみの色

### 【ZPDF】

Z9158D

### 【作者名】

沢河沢

### 【あらすじ】

十一歳の冬から書き始めた詩です。思ったことを一気に書きまし  
た。家出したり自殺しようとしたり、自己嫌悪に陥ったり、馬鹿を  
よくやる私の、現在進行形の気持ちです。（完結済み）

もう思い出せないよ  
私を呼んだ君の声  
君の短い綺麗な髪

ふわふわ揺れる  
ふわふわ揺れた

もう声が届かないよ  
手を伸ばせば触れられるのに

遠い 遠い  
遠く 遠く

もう諦めるべきなの?

いつの間に伸びたの?長い君の髪

揺らぐ揺  
れる揺れる

揺らぐ揺

いつも一緒にいたのに

君と並んだ写真のね  
私の顔が 黒いんだ  
もう誰かわからないように  
私は何度も塗りつぶす

油性マジックつてこうやって使うんだよ

取り返しなんかつかないのかな  
君を裏切ったのは私

泣いたつて変わらないんだよ

君を傷つけたのは私

やけに冷たい蛍光灯が 君の顔に影を作る

やけに重たい空気の中 今日も変わらず君を思つ

「守るべきものがないからこんなにも人生は楽で困難だ」

君が死んだ  
君も死んだ

それは偶然と必然

生きるものは死ぬ  
それは自然の摂理

無力さに泣き嘆き悲しみにまみれた日々

しかしこいつしか気付く

無力な言葉で無力な人で  
救えると信じた傲慢を  
自意識過剰、過信と愚かさ  
自分の弱さを　自分の無知を

君はいなくとも朝は来る  
君がいなくとも日は暮れる  
僕がいなくとも夜は明ける  
僕がいなくとも月は昇る

でも僕の世界はそれがあつてできていた  
それに気付く時世界は変わる

「罪と罰」

美しいものを見るほどに  
自分の汚さを知っていく  
優しい人に会うたびに  
自分の愚かさに気付いていく

これまで傷つけてきた人  
気付いてないふりしてただけ

歪んだ私に肅清を

壊れた私に厳罰を

死んで逃げるくらいなら  
生きる勇気を 私にください

だけど だけど だけど だから

### 「最後の歌」

いつからか

自分の言葉が出てこなくなつて  
文字を書くのが苦痛になつて  
無理に書いた言葉は歪んで

何故書いていたのだるつ  
何のために書いていたのだるつ  
それさえ忘れて

言葉を奪われることが

これほど辛いものだとは思わなかつた  
思いを伝えられないのが  
これほど苦しいものだとは思わなかつた

いつまでも

響いていたはずの歌

ある日急に聞こえなくなつて

耳を済ませて聞こえたのは風の音

誰が歌つていたのだろう

どんな思いで歌つていたのだろう

それすらわからなくて

支えてくれていた人がいなくなることが  
これほど悲しいなんて知らなかつた  
いつだつて名も知らぬ誰かに  
支えられてるなんて知らなかつた

「暗闇」

私は暗い闇の底  
溺れてもがいて  
落ちて 沈んで

悲しみの音が響いてる  
誰かが泣いて  
私も泣いて

ゆつくり涙が溶けていく  
あふれて拭つて  
こぼれて流れて

さしのべられたその手さえ

拒んだ私  
深みに落ちた

私は暗い水の中  
ゆらゆら うごいて  
ゆつくり 沈んで

泣きたいほどの空の色  
水面のむこう

月が きれいで

「 だけど だけど だけど だから」

耳を塞いでも聞こえる

悲鳴と罵声

息を止めてもわかる  
血のにおい

肌が焼けるかのような  
灼熱の中

目を閉じて いるはずなのに

手に取る ようにわかる 目と鼻の先の惨状  
心が 身体が 覚えている 凄惨な現状

だから俺は

走つて 走つて

走つて

走つて逃げて

逃げたけど 離れられなくて

だから一人 閉じこもつて  
独りで ふるえて  
涙を 流して

全部 忘れよつとして

だけど

だけど  
だけど

俺が壊したものは 壊れたままで

俺が傷つけたものたちは 血を流し続けていて

犯した罪は そのままで

泣いても

叫んでも

走っても

時が流れても

意味はなくて

変わらないままで

耳を閉じても

耳を塞いでも

息を止めても

忘れられなくて

確かにそこにあって

してしまったことを、今更悔やんで  
忘れようとした自分が、憎くて

心が 痛くて

許して ほしくて

変わらうって、決めて

謝ったって 悲鳴は止まない  
悔やんだって 血は止まらない

だけど  
だけど  
だけど

だから

変わらうって決めた

目を開けて  
声を聞いて  
息を吸って

全てを、この手で、この目で、確かめて

逃げちゃダメだから  
逃げちゃダメだから

「ひとり」

いつもいじめられている  
あいちは一人  
あいちは独り

淋しがり屋で自虐的で  
みんなに嫌われているけど  
変わるものでは微塵も見せない

避けられてシカトされて  
殴られて『菌』と呼ばれて  
頼れる人は誰もいなくて  
先生からも相手にされない

きつとかわいそうな子なんだろう  
ねえ、やめようよ

そんなことは誰も言わない  
だって自分の身に降りかかる」とじやないから

今日もいじめられている

あいつは一人

あいつは独り

僕は今日も歌ってる

僕はひとり

僕はひとり

気にしないでください、戯言です。（だつたら載せるなどか言わな  
いでください 泣）

最近考えたこと。

家にあつた広辞苑第一版（1969年出版！）には、約一十万の単語が載っていたのですが、それに全ての日本語が載つているわけはありません（といつよつやんな辞書ありません）。

でも日本語の数に限りがあることに変わりはなく、それは全ての思いや、伝えたいことを、完全に文章にするのは不可能です。

はたして執筆活動をする意味があるのか。

ただでさえ読者様は減つていて自分の無力を日々思い知らされるばかりなのですが、限界があるかもしれないという現実に直面してしまい、更に落ち込みました。文章を書くのをやめようかとも思いました。

文章を作るのが下手で、考え方によっても幅が狭くて、表現方法にも限界がある。  
でもがんばります！

長くなつてすみません

では、本編です

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

## 「悲しみの色」

もう誰も傷つけたくない  
もう誰かが傷つくのを見たくない

もう争いたくない  
もう争わないでほしい  
もう何も見たくない  
もう何も知りたくない

そう思つて いる筈なのに

流れる血を、滴る血を

美しいと思つてしまふ、見惚れてしまつ

そんな私は、狂つて いるのでしょうか？

何故かなんて 分からない  
身体が、心が  
欲して、魅せられて  
その赤を、その紅を  
痛い程、痛む程  
禁忌に、狂気に  
捕われて、囚われて  
探して、捜して

鮮血を、流血を  
誰かが傷つけた、その証を  
誰かが傷つけられた、その証を

求めて、求めて

私は、狂っていたのでしょうか？

いつから

どこから

何故

それともはじめから、

空よ、  
海よ、

大地よ、

風よ、

人よ、

世界よ、

全てよ

染まれ

染まれ

染まれ

染まれ

赤に

紅に

朱に

銅に

緋に

茜に

悲しみに  
血に

「記憶」

約束したあの日 小ちく笑つた君

君は生きると言つた 私は死ると誓つた

また会えると思っていた  
そつ遠くない あさつてとかに

もう会えぬとわかっている

今静かな予感が告げる

君が別人になる

まぶたの裏にいる君によく似た誰か  
手に残るぬくもり君のものではないなにか

君を思い出せなくなる

雑踏のなか振り返る

私を忘れてほしい  
私は忘れられないけど

忘れて生きてほしい  
もう知らないでいてほしい

もう会えぬとわかっている  
だから一度と電話はしない

君が別人になる

最終話です。

ここまで読んでいただけて、とても嬉しいです。

また詩がたまつたら、違う題にして書こうと思ひます

突然ですが、文章で世界が変えられないのはもうわかつています。

人を感動させることはできるかも知れません

でもどんな人の文章でも、どんな願いがこめら

文章でしかありません。

人が実際に経験して、生身の人間に教わったことには勝てないです  
もし文章がそれらに勝つてしまつたら、人と人とのつながりの意味  
が薄れて、なくなつてしまふと思うんです。

戦っている兵士たちや、働いている子供たち。  
人として扱われていない人々。

そんな人たちの現状を変えられるのは、それを伝えた文章を、読んだ人の行動なのです。

文章を書いただけでは意味がありません

私が文章を書き続けるのは、何より伝えるべきことがあるからで、それを伝えたいと思うからです。少ししか役に立たなくても、できることがあるのに何もしないのは罪だと思います。下手くそでも。

最後に。

ここまで読んでくださった方々、  
応援してくれた友人や先輩、近所の人や先生、  
感想や激励の一つ一つが励ましになりました。  
本当にありがとうございました。

2008、3、30

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9158d/>

---

悲しみの色

2010年10月9日11時23分発行